
青春謳歌

L A B .

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

青春謡歌

【著者名】

20995A

【作者名】

L A B .

【あらすじ】

毎年の通り日差しがキツイ夏のある日。少年の青春が始まった。物語は少年が5年前の出来事を懐かしみながら書く思い出。どんな結末を少年は迎えたのか…

#1・始まりの歌（前書き）

#1はプロローグになっています。短いですが読んでみてください。

#1・始まりの歌

「ああっ！彼女欲しい！」

「俺も！」

何気ない高校生の嘆き。

一学期の終業式の帰りだった。

主人公、滝田 俊【たきだ しゅん】は、市立尼之崎工業に通う一年生。

その横にいるのが滝田の小学校の時からの連れ、池波 雅樹【いけなみ まさき】。この炎天下の中、一人は周りの目をかえりみず大声で叫んでいた。

「あー…マジで彼女ほしい…」

学校からJR尼之崎駅までは徒歩15分。

二人はそれしか言わなかつた。そして駅横広場のベンチに腰掛け制服する。

「フーッ…セッタつめー」

座るやいなや滝田はセブンスターを吸いだす。

「あーあ…知つてゐるか池波…」

「何を？」

「真木もヤッたらしこだ…」

池波は一瞬止まつた。

「…………つああー…マジでー…?」

真木とは2人の中学の同級生である。

「俺らまだ15、6の若僧だぞ? ヤッちまつてこのかよ!」

「池波…もし田の前に股開いてカモーンしてゐる女子高生がいたらどうする?」

「はっ! 飛込むあります隊長!」

「だろ? つひ」とせ15、6でもヤッちまつていいんだよ…」

「とつあえず18歳でこは終わらせへーな」

「まーなー」

当時の自分はこんな馬鹿だったのかと書いていて少し悲しくなった。

「うちの学校の女子の人数数えてみろよ」

「えーと……いち……にい……」

池波は数えるうちに落ち込む。「一年生4人……絶望的数字だ……」

そう、工業高校ということでこの学校には一年は4人しか女子がない。男子150人に對して。

単純に考えても146人は余る。

もう外で彼女を作るしかないという答えがおのずと出るのだった。
「つづー」とで明日お前の家で作戦会議な

滝田の口は真剣だった。

「お待ちしております」

無論、池波も。

#2 · 決意の歌（前書き）

今回も短めに書きました。その為次話の投稿は少し早めにします。

#2・決意の歌

次の日…

滝田は尼之崎駅から徒歩20分ほど走りながらある池波の家に来て
いた。

「正直俺は尼工あまくわで女を見つけるのは不可能だと想つ」

淡々とした表情で池波が話しあじめた。

「かといってナンパをする勇気もない……それじゃだ……」

「わつわと聞こえよ」

「最近流行りの出会い系サイトってのはめでりつだ?」

滝田は速攻否定した。

「そんなもんは援交オヤジめいこうヤジにせらせらやることなんだよ。ガキが手え
出すもんじやねえ」

「却下。ありえねー。」

「うへへ…」

滝田はカツコつけたが正直矢張りしきりとあきやよかったといつ後悔
も少ししていた。なんせ頭の中は思春期特有の妄想でいっぱいだ
たからだ。

「よし……お前はテキトーに頑張れよ。俺は探す!」

「はあ？」

「こぞり、出会い系」

「おひつ…池波…」

その後2時間ほどケータイとこじらめっこしている池波の横で、タバコを吸いながら鬼武者をしてから帰った。

あれから数日後。

学校は夏休み入っていて、いつものように滝田は10時に起床する。

「ふああ…眠い…」

意識が朦朧もうろうとしたまま風呂場へ向かう。

そして目を覚ます。

風呂からあがつてケータイをチェックすると着信が5件、メールが13件来ていた。

「おお…俺人気あんじやん 誰と誰と誰だあ？」

考えが甘かった。

全て池波からだった。

【起きたか？】

【おこ！起きろ！】

【寝たふりすんな！】

【電話出ろよ！】

【寝すぎ…】

【てかマジで寝すぎーー起きろー】

こんな感じで13件全て池波メールだった。

「うわ…最悪」

仕方なく池波に電話をかけた。

トウルルルル…

トウルルルル…

「おう！遅よ、ついであります」

「なんか用か？ストーカー」

「ふつふーん 今の俺にはそんな下品な言葉は通用せんよ」

「だからなんだよー！」

「心して聞け友よ。わたくし、昨晩彼女をゲットいたしましたーー！」

「……え？」

「前に言つただろ？こぞ出会い系つて。メール送りまくつてたら返事帰つてきてよ。そんで会つてデート重ねて口クつてオーケーもらえたわけよ！フーッ！」

「…どんどん拍子だな。おめでとうさん」

そして滝田は電話を切つた。

髪を乾かしながら滝田は考えていた。

(ちくしょう…やりやがったなあいつ…俺はといつとあれからなんもしてねー…やべえ)

滝田は決心した。

何を決心したかはまた次のお話。

3・心で泣く歌（前書き）

小説評価して下さった方、読んでくれた方ありがとうございました。
これからも応援してください！

3・心で泣く歌

池波に彼女ができた…

しかも年上…

今まで生きてきて何度もあつた敗北感の中で見事首位を獲得した出来事だった。

イライラしてタバコの量は増え、その日は何をしたかは覚えていた。

かつた。

それからしばらくたつたある日…

久々に池波に会うことになり、朝からでかける準備をしていった。

「紹介するから明日俺の家に来い」

やつの言葉はそれだけだった。

俺は別に見たくもなかつた。

といふか会うのも嫌だつた。幼馴染みの彼女。複雑な気分で家をでた。

電車に揺られること20分。イライラをまきりわす為に寝ていた。

「尼之崎～尼之崎～」

車掌のウザイ声で起こされる。

池波と俺は元々葉田【はだ】といふことに住んでいたが、中2の時池波が親の事情で尼之崎に転校していく、もう会うこともないと思つていたが…なぜか高校の入学式で再会してしまう。

会つた時はマジで驚いた。多分これが腐れ縁てやつかなと今だから思える。

「はあ…憂鬱…」

駅を降り歩きながら滝田はため息ばかりだった。

会つてなんて言おうか。

こんにちわ…その後の言葉をいくら探しても出でるわけもなく、

早くも池波の家に到着してしまった。

「…………」

玄関の前に来た時にはすでに言葉はなく、入学式並みの緊張感で溢れかえっていた。

ピンポーン…

力チャ

チャイムを鳴らして2秒。そこには奴がいた。

「早え…」

「ようこそ友よ。さあ入った入った」

池波の部屋に入るとそこには背を向けた女の子がいた。

「あ…どうも…滝田です…」

「え?」

振り返るその子の姿は、さつきまでの俺の緊張を完全に無駄にしてくれるキャラでした。

「…池波…この人がお前の?」

「当たり前じゃん。それ以外のなんなんだよ」

幼馴染みの彼女、ということで大目に見ても俺には可愛いことは思えなかつた。

中の下…といったところか。

なぜか男はこうこう時に女の子を【上中下】でランク付けしてしまう。女性の方、申し訳ない。

「はじめてまして。井上由衣【このつえゆい】です」

可愛い…確かに声は可愛かつた。

羨ましいに値するだらう。

「あの…こいつから年上だつて聞いてたんだけど何歳すか?」

「18だよ。今年19になるけど」

「由衣今年の春から尼大通つてんだよなあ

「うん」

(え?女子大生っすか?)

第一印象は抜きにして羨ましさがMAXに達し、同時に劣等感に

襲われた。

この後3人でファミレスに行き、夕方に尼之崎駅で別れた。
帰りの電車で滝田は少し泣いた。（嘘）

4・楽しみの歌（前書き）

お待たせしました。お話をもうすぐ前半を終えます。まだまだ続きますので応援よろしくお願いします。メッセージお待ちしております。

4・楽しみの歌

ミーンミーンミーン…

池波の彼女、由衣さんに会つてから1週間。夏は本格的に始まった。
滝田はとくに彼女探す気配もなく、ただただ地元の連れと遊ぶ毎日だった。

「暑い…溶ける…」

滝田はコンビニの前のベンチで、相も変わらずタバコを吸っていた。
連日猛暑が各地で相次ぎ、最高気温36度をマークしていた。

「帰るか…」

滝田がベンチから立つたその時だった。

着メロが鳴った。

当時すでに解散してしまっていた19【ジューク】の蒲公英【たんぽぽ】という曲が流れた。

「ん？」

滝田がケータイを取り出して見てみると案の定池波からだった。

【由衣に頼んで飲み会開いてやろうつか?】

このメールは後に運命のメールとなる。

【3人で飲んでもつまらん。2人で行けよ】

滝田はつまらんメールを送りやがってと思いつつ返信した。
そして1分もたたないうちに返事は返ってきた。

【由衣の友達も来るんだぞ?しかも彼氏はいないらしく。どうするよ?】

「ゴクリ…」

滝田は考えた。

いいのか俺…

飲み会に行つていいいのかい?

答えは意外とすぐに出た。

【あ、お願いします】

【おひしゃーじゃあ詳しく述べたから連絡するな】

その夜はなぜかドキドキして疲れなかつた。

今思えばドキドキするのが早すぎだと思つ..

それから2日くらいいたつたある日。

ようやく池波からメールが届いた。

【よう！日時決まったから。

一週間後の水曜日。尼之崎駅前のボーリング場前に1~2時に集合いいな？】

すばやく返信。

【任せろ。俺は遅刻が大嫌いな男だ。】

今現在の滝田は遅刻は頻繁にするタイプになってしまつてゐるが..

当時もたまに..

まあやつきのメール内容は嘘をついているわけです。

【都合がいいやつめ！遅刻魔！！滝田は遅れんなよー（^__^）】

さすが幼馴染み。嘘がきかない。

【任せろ】

このメールを送つて滝田は地元の連れと遊びに出掛けた。

一週間後の水曜日を楽しみにしながら..

飲み会はまた次の話で

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0995a/>

青春謳歌

2010年12月14日03時32分発行